

症例からみる診療のポイント

Case.3 | 休薬に成功し、皮膚バリア機能も向上した症例

プロフィール トイ・プードル 1歳4ヶ月 避妊雌

診断 犬アトピー性皮膚炎 (CAD)

ポイント CADに対するオクラシチニブの休薬、皮膚バリア機能指標の改善

症例経過

症例背景

1歳齢で発症したトイ・プードルのCAD症例で、慢性再発性の痒痒を呈していた。症状は顔面に強く認められ、皮膚炎に先行して痒痒が認められることもあった。

検査～診断

皮膚科学的検査では、外部寄生虫、細菌、真菌感染は否定された。皮膚バリア機能評価においては、角質水分量の低下(8.4 A.U.)と経表皮水分蒸散量の上昇(8.5 g/m²・h)※を認めた。厳密な除去食試験(アミノペプチドフォーミュラ小型犬用、ロイヤルカナンジャポン)を実施したが、皮膚症状の寛解には至らなかった。

したがって、本症例を**環境アレルゲン誘発性、皮膚バリア障害を伴うCADと診断**した。

※正常犬では角質水分量およそ20 A.U.以上、水分蒸散量3 g/m²・h以下を基準とする。

投薬治療

初期治療としてオクラシチニブ(0.6 mg/kg, 1日2回)により加療した結果、臨床症状が寛解し、その後は常用量のオクラシチニブ(0.6 mg/kg, 1日1回)で管理された(図1)。

投薬治療時



(図1)

食事療法後



(図2) 皮膚および被毛の状態の顕著な改善が認められた。

食事療法

●スキントピック給与期間:2ヶ月

オクラシチニブの減薬を目的にスキントピックの給与を行った結果、給与開始1ヶ月後にオクラシチニブを隔日投与に減量することが可能であった。さらに1ヶ月間スキントピックの給与を継続した結果、**オクラシチニブの休薬に成功**した(図2)。

また、スキントピック給与開始2ヶ月後には、**角質水分量の増加(16.4 A.U.)**および**経表皮水分蒸散量の低下(5.0 g/m²・h)**を認めた。

ペットオーナーの反応

スキントピック給与開始1ヶ月後から明らかに痒痒が低下して積極的に減薬できたにも関わらず、毛質や皮膚状態が良くなりました。



本症例の担当医 栴嶋先生による考察

CADの管理において皮膚バリアの強化は必須の治療ですが、保湿などのスキンケアは症例やご家族の負担となる場合が少なくありません。本症例のように療法食によって皮膚バリア機能が改善できれば、CADの長期管理におけるアドヒアランスの向上につながると考えます。



栴嶋 悠一郎先生 サークス動物病院・JAHA獣医総合臨床認定医 [指導医:伊從 慶太先生]